台湾俳句史（1985～2013）（1）

～結社と俳誌～

呉昭新（医師・俳人）

６月号では、台湾においても日本の俳句が息づいており、台北にある俳句会では様々な立場の方が俳句を詠み合い、日本語で交流を深めている様子をご紹介致しました。今月号より、台湾の医師で、台湾における医療分野での功労者（脚注１）であるとともに、特に俳句に対して深い見識をお持ちの呉昭新先生による、日本語での手記となります。俳句が台湾に根付いてきたその歴史とそこから見え隠れする台湾俳句の未来について、３回に分けてご紹介します。

脚注１．呉医師は、台湾中山医学大学付属医院院長、省立台北医院院長、台湾衛生署（現福利衛生部、厚生労働省に相当。）国立予防医学研究所所長及び検疫総所所長を歴任している。

俳句は「俳句」、「HAIKU」として今や世界中のあらゆる言葉を使う人々に受け入れられている。だが俳句の源泉国である日本ではどうかと言うと、まだまだ大多数の俳句ファンは、俳句は日本語で定型有季、花鳥諷詠でなくてはならないと思い込んでいる、または強引に主張する人さえいる。

「HAIKU」は日本語以外の言葉（外国語）で詠まれる俳句で、漢字だけで詠まれる「漢語俳句」をも含み各言語で普及しているが、その定則には一定の規制はなく、ただ一番短い三行詩だという理解で受けいれられている。外国語といえば一応アクセントというのがある、それでアクセントを気にする方もいるが、相手にしない方もいる。季節にいたっては南半球と北半球ではまったく反対であり、国や地域によっても大いに違っているし、季節がない地域もあるので、共通の季語は不要と考える人など、さまざまである。また季語を入れても季感をなさず、季語本来の意味をなくしているので、取らぬ人も多けれど、他方日本の伝統派に倣ってなんとか季語を入れる人もいる。が、季感がない。季語ではなく生活、社会に関するキーワードを使う人もいる。いずれにせよ、「HAIKU」は短詩の一ジャンルとして世界的な広がりを見せている。米英を中心に英語俳句があり、アジアでは諸言語で俳句が詠まれている、とくに漢語系諸国では漢俳として, 中国で持てはやされているが、後述するように、「漢俳」は一種の短詩ではあるが絶対に俳句ではない。（世界俳句第７巻、2011、参考）。

明治の日本で子規が客観写生を提唱したその時期に、西欧では、日本から伝わった芭蕉や一茶の発句が、西欧諸国語に翻訳された。俳句の翻訳は詩としての詩情内容を損なわず、相当的確に翻訳されるのが可能であることが証明された、ただ日本語特有の掛詞、文化的記憶を除いてのことである。それは俳句が短く、難しい言い回しがないからである、そしてなぜ俳句が翻訳可能であったかというと、俳句の詩的本質が、五七五の韻律に依存するものではなく、日本語以外では五七五の定型は無視され、意味のない季語は外されたからである。そして逆に、西欧では詩に不可欠と考えられていた押韻が、詩の本質にとっては必ずしも重要な要素ではないことが、各国語に翻訳された俳句によって明らかにされた。欧州理事会のヘルマン・ヴァンロンプイ常任議長は、句集『Haiku』まで出している。そして議長は『俳句は翻訳可能だ

と話している。俳句は押韻なき詩であるがゆえ、俳句はどのような言語によっても、作ることができる、そして作られたのである。一般に俳句には韻律がないと言うが、日本語俳句には575の律があり、外国語では押韻しようと思えば出来ないことでもない、口ずさんで、または読んで佶屈聱牙でなく、耳に楽しければ、鮮明なる外在韻律がなくても、俳句には詩想のうえで感じられる内在律があるのである。

これらはさておき、この小文においては、広い意味の俳句（HAIKU）の立場から台湾の俳句事情または俳句史について述べさせていただきたい。

さて、台湾での俳句事情はどうかと言うと、その他の地域とは大分違っている。ブラジルは日本から言えば遠くて近いところ、そして台湾は近くて遠いところといわれている、その理由はともかくとして、この二つの場所は日本語事情については似ているといわれている（ハワイでも同じことが言える）。というのは、ブラジルと台湾の人たちは戦前までは日本語が他の国よりも日常生活に多く使われていたからである、でも使う人達そのものは違っていた。ブラジルではブラジルに移民した元日本人であり、一方台湾人は日本に統治されていた異民族であるがゆえ、前者においては戦前戦後において日本語の使用の原点には変わりはなかった（三世になると日本語を話す者がすくなくなった）、が台湾においては、戦後日本語は禁止されたばかりでなく、敵国語として不倶戴天の仇の立場におかれた、それ故戦後における日本語の使用事情はまったく違っていた、日本語を慣用する台湾人は一夜にして文盲になったのだ。

台湾が日本の統治下になったのは1895年（明治28年）、子規が客観写生を説き「ほととぎす」の創刊を指導したのが1897年（明治30年）、そして台湾での日本語教育は伊澤修二らによってすぐ始められた。最初は六名の教師が原住民部族の襲撃によって惨死するなどの悲劇があったが、漸次小学校、中学校、高等学校、師範学校、各種専門学校、帝国大学の設立があり、爾来終戦当時にいたるまで50年の間に日本語教育を受けた台湾人の数は日に増し、教育機関数の統計記録から大よその推定ができる。1900年頃の台湾総人口数は約300万人、終戦二年前の1943（昭和18年）年の統計では、約600万の人口で、内日本人は約60万人である。そして台湾人児童の就学率（義務教育）は男子93%、女子85%、1920年代（大正後期）の33%に比較して大幅の躍進が見られる。1944年4月において、国民学校1,099校、児童数932,525人（台湾人、867,748人）、中等教育での中学校は22校、生徒数15,172人（台湾人7,881人）、高等女学校22校、生徒数13,270人（台湾人4,853人）である、それに各種実業学校は計27校、生徒数14,626人（台湾人9,194人）で、高等学校以上の学生数は含まれていない。このほか、島内での進学に阻まれた多くの台湾人学生は、家況が許す限り、多くの者が、自由に入学を制限されていない本土の学校へ進学した。つまるところ、終戦当時、1910以後出生した人たちはみな日本語をよくする人たちであるという事実である（一部の者の台湾訛りを問わなければ）。

さて私が言いたいのは、終戦をメルクマール（判断基準）としてみる時、台湾人で中学までの教育を受けた人たちは俳句を詠もうと思えば日本人と同じ能力を持っていた、それゆえその時点、特にそれ以前35年間における台湾の俳句事情は在台日本人と台湾人を問わず、日本本土におけるのと同じである。ということは日本で俳句がどういう人たち、社会層、年齢層に受け入れられているか、また俳句結社、俳誌や有季定型、自由律，無季非定型などの絡みについては、台湾でも日本本土と同じであると言うことである、たとえば小学校や中学で教わる俳句、女性や高齢者に俳句を詠む方が多いことなど。が、事実は少しズレがあった、台湾人日本語習得人口と俳句趣味人口は比例しな

かった。俳句人口は、藤田芳仲「台湾俳壇展望」（昭和7年9月『台湾時報』154号42頁）に拠ると、昭和7年頃の台湾の俳句人口は約6700人であったが、その内の4500人は「ゆうかり」派で、後の2200人は他の派の俳人であったと言う。

台湾での日本統治時代における俳句事情に関しては近10年来、台湾または日本で日本文学を専攻された人たちや日本で台湾の日本語文学に興味を寄せた人たちによってすでに多くの整理研究がある（阮文雅、沈美雪、蘇世邦、周華斌）ほか、日本人の島田謹二の「正岡子規と渡辺香墨」、「続香墨論」また阿部誠文、磯田一雄らによっても紹介されている。ただ外国語俳句「HAIKU」については、まだである。

この小文においては、（一）結社、俳誌、（二）季題、季語、歳時記、（三）日本語俳句、外国語俳句（HAIKU、漢語俳句）、ネット俳句について項を分けて年代順に述べさせていただく。また日本統治時代の俳句事情については上掲諸氏の研究論文から引用させてもらい、戦後における俳句およびHAIKUについて、そして台湾人の跨言語世代の様相については、私見を述べさせていただくつもりである。

（一）結社と俳誌：

1．『相思樹』：日本派

俳誌『相思樹』は台湾最初の俳誌である（明治37．5～43．2）、その後50年の間に台湾で発行された俳誌は20種ちかくあり、よく話題にのぼるのは『ゆうかり』で1921年から終戦時（1945年）まで続いた。

台湾は明治28年（1895）に清国より日本に割譲された。沈美雪氏によると台湾における俳句受容は、旧派も新派もほぼ同時期に並行して流入してきたとされている。初期の台湾俳壇は日本人のみで、『台湾日日新報』の俳句欄「日々俳壇」の選者を勤めた高橋窓雨などの旧派宗匠がリードしていたが、子規の高弟である渡辺香墨の台湾赴任により、新派俳人は指導者を得て、台湾に移住した日本人の間には、子規の俳句革新に同調する俳人もかなり増え、『ホトトギス』が創刊されると子規の俳句革新の主張に賛同する台湾在住俳人が、台湾の風物を読み込んだ句を『ホトトギス』に発表するようになった。『ホトトギス』創刊（1897）の翌年にはすでに台湾在住の俳人の投句も見られた。窓雨は明治30年（1897）6月に渡台し、明治31年（1898）に『台湾日日新報』が発刊されて以来、同紙の俳句欄の選句をし、多くの同士を募って初期の台湾俳壇における一大勢力を作った。

『相思樹』はホトトギス系の結社「竹風吟壇」の同人を主体として明治37年（1904）5月15日に発行された俳誌で、創刊号は菊版16頁の小冊子であった。しかし沈氏によれば、『相思樹』の史的意義は多大なものであるにも関わらず、それについての論説は、島田謹二の「正岡子規と渡辺香墨」、「続香墨論」、阿部誠文の「台湾俳壇史」（俳誌『燕巣』にて1999年より連載中）に言及があるのみである。『相思樹』創刊当初の主筆を務めた渡辺香墨は初期の台湾俳壇の基礎を作った一人であり、彼の台湾での文学活動は島田謹二の上述の論文で詳細に論述されている。また阿部誠文の「台湾俳壇史」は『ホトトギス』に発表された台湾俳人の作品を取り上げ、句評を加えたものである。

『相思樹』の誌名の相思樹はその閑雅な姿から台湾では歩道の並木あるいは鑑賞として至る所に植栽され、南国的情趣の溢れる植物として台湾の俳人に愛されている。『相思樹』の選者だった香墨・鳴球・李坪の3人は『相思樹』を通して明治期台湾俳句界の基盤を作った先人である。また作品の面において台湾俳句には異文化の交流と融合が見られ、内地趣味ではなく台湾特有の季題趣味を研鑽しはじめたのも『相思樹』の俳人たちであり、その集大成が明治43年（1910）に出版された

李坪の『台湾歳時記』である。

『相思樹』編集者の服部烏亭の「寄空鳥《上》」によると、創刊の発起者は堀尾空鳥、田内芋作、加藤申衣、蝸居（本名不詳）、服部烏亭の五人である。その他竹風吟壇時代からの古参には、みの作、落水、稲城、天涯（法経堂）、李坪（本名小林里平）があり、『相思樹』発刊以降は山田不耳、藤井烏犍、庄司瓦全などが加わった。有力同人は上記の他に基隆の吉川五平太６や、金瓜石の渡辺風山堂などがいた。『相思樹』はその主筆と傾向により、前期（渡辺香墨主筆時代）と後期（岩田鳴球７主筆時代）に大別できる。

前期『相思樹』の主筆の渡辺香墨は小林李坪と共に当季雑詠の選者として発刊当初の『相思樹』を支えた。香墨は明治32年（1899）12月に台湾総督府法院検察官になり、翌年１月に台湾に赴任し、明治39年（1906）２月に離台するまで台湾で６年余りを過ごした。小林李坪は埼玉の出身で、本名は里平、李坪は本名に因んだ俳号である、明治33年頃渡台し、法院嘱託となり台湾固有の習俗を調査する「台湾慣習調査会」に所属し、また総督府管轄の台北地方法院の書記官も兼任していた。「南蛮会９」、「竹風吟壇」に参加し、明治40年（1907）に緑珊瑚会を創立し、明治末期まで俳壇をリードした。著書に『台湾年表』（伊能嘉矩との共著、琳瑯書屋、明治35年出版）、『台湾歳時記』（政教社、明治43年出版）などがある。二人は共に正岡子規の教えを受けた日本派の俳人であり、渡台後は多くの俳人を育て、初期の台湾俳壇の発展に大きく貢献した。

島田謹二は、『相思樹』同人が創刊初期において窓雨一派を主とする「日々俳壇」と正面衝突し、激烈な筆戦を交わしたと記している。

香墨は明治34年（1901）１月に台中、明治37年（1904）３月に台南に転勤し、その度に指導者として句会に臨み、地方句会の発展に尽力した。しかし地方句会の多くは香墨の指導により新風に目を向けるようになったものの、指導者を失ってからは再び旧派の勢力に支配されるようになった。香墨が台湾を離れ、李坪らが『相思樹』を抜けると、鳴球は実質的に主導権を握るようになった。後期の『相思樹』は投稿や投句の量において不振に陥り、存続が問題となった。その兆しは第５巻の改巻号からすでに見え始め、改巻号であるのに、全巻の約半分が主幹の鳴球の「琥珀帖」という７年前の日記で頁数を埋め合わせていた。『相思樹』の不振による廃刊の兆しが濃厚になってきた中で、有力メンバーで且つ『相思樹』の経済的後援者の一人でもある実業家の吉川五平太が「相思樹改善案」と題する一通の手紙を鳴球に寄越した。これは台湾最初の俳誌である『相思樹』の衰微を「非常の痛恨事」と感じた同人吉川五平太が、何とかして『相思樹』を再生させようとした提案である。雑誌編集の難点は「主幹者の多忙なる境遇」「会員一同不熱心」「会計の困難」三点にあると分析し、それぞれ対応策が考え出された。「会員一同不熱心」は、おそらく『相思樹』の存続の危機にある一番の根底的な原因である。当時は新傾向俳句を標榜する緑珊瑚会が『台湾日日新報』を拠所にし、多くの俳人の支持を得ていた。緑珊瑚会勢力の勃興と対照的に『相思樹』はますます下降気味になっていったのである。「相思樹改善案」を進言した二年後の明治44年（1911）９月に、五平太は南部旅行中濁水渓架橋通過の際橋より墜落し、42歳の生涯を閉じた。大正５年（1916）８月刊行された五平太記念号が『相思樹』の終刊号となった。

一方明治40年時代に河東碧梧桐が提唱した新傾向俳句が全国を席巻する勢いを見せた中、台湾でも河東碧梧桐の来台を機に、李坪や空鳥らによって発起された緑珊瑚会が碧派の句会に転じ、碧梧桐の唱導する新傾向の俳句をめざして、固定した季題趣味から脱しようと模索し努力した。それに対して、『相思樹』同人は新傾向に興味を示し

つつも、ホトトギス系の俳誌を標榜し、旧派俳人を大量に受け入れた緑珊瑚会の「来る者拒まず」の方針を痛烈に批判した。中心人物の鳴球は、一面においてはその傲岸不遜な態度のため多くの俳人の反感を買ったが、三井物産会社の台湾支店長として在台10年、台南、彰化、台中など中南部に住居を構える度に当地の句会を指導し、地方俳壇の発展に尽力した功績もある。

後期『相思樹』時代は作句の面において、樵山が編集を勤めた時期に雑詠・課題詠のほかに、「一題百句吟」や「互評俳句」などの募集も試みられた。一題百吟は一つの題に対して百句を出句することであるが、選者が内地著名俳人の小沢碧童ということもあり、当時は少数の熱心者が作句していたが、その後は何の音沙汰もなくなった。互評俳句欄は「雁来紅」と言い、樵山企画の俳句コーナーとして比較的人気を博していたものの、第6巻に入ってから投稿者は激減した。後期『相思樹』は編者が度々変わり、発刊も不定期になっていたが、地方句会にはいくつか特筆すべき動きがあった。その中でも北部の基隆に在住の俳人を中心に開始された「台湾五句集」の集会と、中南部の俳人が主になって発起した「涼樹傘」句会が同人を引率する力となっていた。

「台湾五句集」は『相思樹』系俳人の吉川五平太、山本風雨楼（常之助）など基隆在住の俳人によって発起された集まりであり、ほかに緑珊瑚系の青甫などの有力俳人がいた。明治41年（1908）頃、当地に「二二吟壇」が結成された。この二二吟壇は緑珊瑚会の俳人が主体となり、明治43年（1910）２月号の『ホトトギス』にもこの句会の記録が載っている。風雨楼のような、竹風吟壇と緑珊瑚の仲直りを願う竹風吟壇の同人も参加していた。その二二吟壇の記録が、翌月である明治四十三年二月号に載っている。そこには、今までのメンバーは一人も参加せず、台湾俳壇で初めてみえる青甫と風雨楼の名がみえるだけである。『緑珊瑚』に二二吟壇の句会報を書いたのは「青甫」であることから、彼が句会の中心人物であることが分かり、他に露村、八洲、硯水、周陽などがいる。風雨楼は明治42年（1909）12月には既に逝去しており、明治43年（1910）１月号の『ホトトギス』句会報に見える台湾五句集が台湾五句集最後の記録となったのは、風雨楼の死により台湾五句集が解散もしくは中止になったからと見て良かろう。

各地の俳人が活発に投稿したこの句会の詠句は『相思樹』に多く掲載され、投句者の作句力の高さが目を引く。上記２人の他に、貫城、北攝、迂骨、迂世丸、鐘堂、宙洋、八面峰、鎮西郎、塩村、霞堤、烏亭、枕流、芋作なども熱心に投句していた。「台湾五句集」で選出された句は『ホトトギス』にも紹介され、明治後期の台湾におけるホトトギス派の勢力を示す存在となった。

阿部誠文の「台湾俳壇史」は、２回連続で『ホトトギス』に採録された「台湾五句集」に触れ、迂世丸の「獄曳の出て行く跡に泣く子かな」と貫城の「舞猿や蜜柑をかくす陣羽織」二句を紹介した。『ホトトギス』42年３月号の最初の記録は、「台湾五句集」第６回の集会で詠まれた作品であり、題は「猿引」で出句者21名、選者18名である。沈氏は文献資料を調べて、こまごまと明治時代の台湾俳壇の実情を記述している。

大正時代の台湾俳壇は、諏訪素濤を中心とした河東碧梧桐系の「新傾向」俳句が一世を風靡しており、『熱』や『麗島』といった雑誌が発刊されていた。しかし、大正９年には『うしほ』が、翌大正10年には、『ゆうかり』が創刊され、「ホトトギス」派が全盛を迎える昭和初期の台湾俳壇を準備した。昭和初期の台湾俳壇は、「ホトトギス」派である、山本孕江の主宰する「ゆうかり」派全盛の時代であった。

台湾で俳句結社雑誌を出して名を残したのは日本人山本孕江の『ゆうかり』でそのほかに最近諏訪素濤の『熱吟社』が注目されている（阮文雅、

沈美雪、楊雅恵、周華斌)。少し日本本国と違うのは台湾で俳句を詠む方の多くは同時に短歌や川柳も詠むことであり、戦前戦後を通じて同様であると。

2.『ゆうかり』:ホトトギス派

『ゆうかり』は昭和の台湾俳壇を代表する俳誌でまた最も長く続いた(大正 10. 12〜昭和 20. 4)、主宰は山本孕江。俳句結社「ゆうかり」の前身は、大正 7 年 1 月に幸田青緑によって創設された「魁吟社」であった。その翌年の大正 8 年春、綾部王春を中心に「魁吟社」の会員が独立して「ホトトギス」系の「南吟社」を結成した。会員には三上孤羊(後の惜字塔)や大久保黙山があり、高雄の「哨船頭吟社」の互選回覧紙に倣って回覧紙『南』を作り回覧したが、大正 10 年 5 月に「哨船頭吟社」の山本孕江が、高雄税関から台北の中央研究院に転勤したのを機に、「ゆうかり」社が結成され、孕江を編集者として俳誌『ゆうかり』が創刊されることとなる。同年 12 月には山本岬人が入会し、会はますます盛んになって行った。当初の雑詠選者は前年渡台した「ホトトギス」の佐藤夜半であった。大正 12 年 9 月からは、東京の渡辺水巴が雑詠選者となったが、水巴は選が遅れがちであったため、同年 11 月以降は村上鬼城が雑詠選者となる。その後、「ゆうかり」社創立 10 周年にあたる、昭和 6 年 10 月からは、孕江が雑詠選者となり、昭和 4 年 5 月からは、阿波野青畝が「ゆうかり句帖」の選者を務めた。

山本孕江(1893〜1947)は、高知県生まれ。本名は昇。台湾におけるホトトギス派の中心人物である。編著に『ゆうかり俳句集』(昭和 10 年 10 月ゆうかり社)。句集『山本孕江句集』(昭和 17 年 11 月同句集刊行会)がある。

主な参考文献

1)沈美雪:『相思樹』小考―台湾最初の俳誌をめぐって―(日本台湾学会報第十一号(2009.5)(全 14 ページ)日本台湾学会報第十一号(2009.5)(日本語)

2)阮文雅:異国人の日本語文学――台北俳句会の一考察;植民地文化学会　2008 年 7 月 13 日(日本語)

3)蘇世邦:台湾俳句の季題について―「椰子」の句を例として(南台科技大學/應用日語系/97/碩士/097STUT0079004)2009(全 141 ページ)(華語)

4)沈美雪:「漢字文化圏における俳句受容の現状と問題点―台湾俳壇の歴史を中心に―」 2006 年 6 月 3 日(『日本台湾学会第八回学術大会報告者論文集』所収)(日本語)

5)沈美雪:「明治期の台湾俳壇について――俳句受容の始まり――」
『2007 年度日本語文・日語教育国際学術研討会会議手冊』2007 年 12 月銘傳大学応用日語学系・台湾日本語文学会・台湾日語教育学会所収。(日本語)

6)沈美雪:「台湾に於ける俳句受容の始まり――俳句流入の十年間をめぐって」『明道日本語教育』第 2 期 2008 年 7 月所収。

7)磯田一雄:戦後台湾における日本語俳句の進展と日本の俳句結社
―『七彩』・『春燈』・『燕巣』とのかかわりを中心に―東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研究所)(日本語);第 57 号, 2012 年, 1-14 ページ(日本語)

呉昭新先生略歴

「2011 年 9 月第 6 回世界俳句協会大会で講演される呉昭新先生（於：明治大学）」

1930 年　生まれ
台湾彰化県出身

【学歴】
1957 年　国立台湾大学医学院医学部（七年制）卒業
1973 年　日本国立鹿児島大学医学部医学博士
　　台湾教育部審定教授

【職歴】
1957-1960 年　国立台湾大学医学院付属医院内科医師
1960-1965 年　馬偕医院内科主任医師
1965-1968 年　開業
1968-1971 年　台北鉄道医院内科主任
1971-1972 年　中山医学専科学校（現中山医学大学）内科主任教授兼付属医院院長
1972-1981 年　省立台北医院内科主任
1982-1986 年　省立台北医院院長
1986-1989 年　省立台南医院院長
1989-1992 年　衛生署予防医学研究所所長
1992-1993 年　衛生署検疫総所所長
1993 年 2 月　公務員を退官

【賞与】
1963 年　台湾医学会杜　聡明博士優秀論文賞受賞
1999 年　国家生技既医療保険委員会・全球展望医学基金会　特別医療貢献賞受賞
2012 年　日本短歌詩人協会　第七回国際短歌大会コンテスト　Certificate of Merit by Yasuhiro Kawamura 賞受賞

【現職】
執筆活動
・肝臓病
・健康診断
・台湾語書籍
Http://olddoc.tmu.edu.tw/chiaungo/whoru/c-v.htm